

教師の  
腕前診断文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県船橋市立二和小学校)  
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

表彰の呼名、  
大きな返事をするには

教師の腕前が試される、学級経営のひと工夫。ベテラン先生によるケーススタディです。こんな時、あなたならどうしますか？

全校集会で表彰が行われます。司会者は子どもたちに座るように指示します。

表彰の担当教師は呼名をする前、「返事をして立ちましよう」と促します。

低学年は元氣よく返事をします。しかし、中学年になると声が小さくなります。担当者は「もう少し大きな声で返事をしましょう」と呼びかけます。

さらに高学年になると、無言で起立します。座っている子どもたちは、返事がないので、「誰だろう？」「どこにいるの？」と背伸びをして探し、見つけると「いた！」と指さします。返事がないことが原因で、体育館がざわつきます。

表彰されることはうれしいのですが、少し恥ずかしいのです。また、高学年といえは思春期。友達が目が気になります。

そうはいつても、呼名をされたら返事をしてほしいものです。今回は、どうやったら返事をするようになるのか考えてみましょう。

## 返事の大小は事前指導にかかっている

子どもは表彰されることを知りません。全校集会の場でいきなり呼名されても心の準備ができていないので、返事が出来なくても当然です。さて、先生はどこで表彰されることを伝ええますか。

① 教室  
② 会場 (体育館)

「②」だと「エッ」と気が動転するでしょう。

全校集会では校長先生の話を聞いたり、他の人が表彰されたりすると思っっています。他人事だったのが、まさか当事者になるとは思いもよらないことです。

「何番目に表彰されるのだろう」「何の表彰だろう」「担当の先生は誰だろう」「演壇で賞状をもらうのかな」「返事ができるかな。聞こえなかったらやり直しをさせられるのかな」と、期待よりも不安が頭を駆けめぐります。

友達から「よかったね」と祝福されることも、それに輪をかけることになります。期待されていると思うとそれに応えなければという気持ちにもなり、プレッシャーがかかります。

高学年なら、「表彰されることで自分が浮いてしまうのでは……」と、友達との関係を考えてしまいます。

一方、担任は表彰されることを伝えたので、ちゃんと返事をするだろうと思っっています。困惑している子どもの気持ちに気づかないまま、自分の務めは終わったと思っっています。

もし返事をしなければ、「事前に知らせたのに、なぜ返事をしないんだ」と叱ることになるでしょう。これでは子どもが可哀想です。

そこで、「①」のように教室で伝えます。こうすると、「何の表彰ですか？」など、担任に質問して気になることを解消できます。その結果、心の準備ができ、納得した気分では会場に向かえます。ただ、これだけでは不十分です。心の準備ができて、体の準備ができていないからです。

教室で返事の練習をします。担任が担当者役となります。呼名されたら座ったままで返事をします。起立しながら返事をする、声が出な

かったり「はい」と間延びしたりするからです。まずは返事だけに集中します。

さらに張った声で返事をするために、勢よく拳手します。そうすることで、意識が上に行くので、「はい」と、大きな声の短い返事となります。腕が勢いをつけてくれるのです。短い返事は素早い起立にもつながります。

この時、友達は返事した子どものほうを一齐に振り向くように指示します。このことで全校児童の視線を浴びる疑似体験ができます。友達も、「ちゃんと返事ができてよかったね」という温かい目で本番を見守ることができるようでしょう。

声を出しての返事と視線を浴びるという事前の体験が、本番への不安を少なくしてくれます。それが表彰への楽しみとなり、友達の拍手を祝福と受け取れるようになります。

